日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度の改定の試み

Toward a Revision of Japanese Gender Identity Scales

1w173033-6　奥山　華子　　指導教員　渡邊　克巳　教授

OKUYAMA Hanako　　Prof. WATANABE Katsumi

概要：日本では，先進国と比較して性的マイノリティの心理に関する調査が遅れている。本調査では，日本でのジェンダーアイデンティティに関する調査を促進するため，世界標準のジェンダーアイデンティティ尺度のUGDS（Utrecht Gender Dysphoria Scale)と GIDYQ-AA（Gender Identity / Gender Dysphoria Questionnaire for Adolescents and Adults）を邦訳し，既存の日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度と比較した。調査の結果，UGDS と GIDYQ-AA は先行研究よりも多くの因子が抽出された。また，UGDS と日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度との間に相関は見られなかったが，GIDYQ-AA と日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度との間には相関が認められた。結論として，現在のジェンダー観の多様化や文化的背景により，先行研究とは一部異なる結果が示されたと考えられる。

キーワード：ジェンダー・アイデンティティ，トランスジェンダー，尺度

Keywords: Gender identity, Transgender, Scale

1. はじめに

近年，日本では性的マイノリティの認知や支援が進んでいる，しかし彼らの心理や行動的な特性の理解は一般的に浸透していない現状がある。一口に性的マイノリティと言っても，その個人特性は多様であり，心の性，体の性，社会的な性，性的な指向，それぞれの特性から自身の性自認を決定する。性自認（ジェンダーアイデンティティ）には，2 つの代表的な定義が挙げられ，1 つが「自分が所属している性別について知っているという感覚のこと」，もう 1 つが「男性あるいは女性，あるいはそのどちらとも規定されないものとしての個性の統一性，一貫性，持続性」である。性が人間のアイデンティティの根源にあること，ジェンダーアイデンティティの形成には，環境の影響が大きく関わっていることから，ジェンダーアイデンティティの考えを当事者だけでなく周囲の人間も理解する必要があると考えた。そこで本調査では，世界で使用されているジェンダーアイデンティティ尺度の日本語訳を行い，先行研究のデータと比較検討することでジェンダーアイデンティティの理解に繋げることを目的とした。

2. 方法

参加者　調査では 132 名（男性 55 名，女性 77 名；平均年齢＝20.66 歳，標準偏差＝1.72，範囲＝18-28 歳）を分析対象とした。調査 2 では，118 名（男性 51 名，女性 67 名；平均年齢＝20.65 歳，標準偏差＝1.74，範囲＝18-28 歳）を分析対象とした。調査 3 では 76 名（男性 35 名，女性 41 名；平均年齢＝20.68 歳，標準偏差＝1.73，範囲＝18-24 歳）を分析対象とした。

質問紙　調査 1 では，邦訳版 UGDS 質問紙 (Doorn et al, 1996; Steensma et al, 2013)，調査 2 では，邦訳版 GIDYQ-AA 質問紙 (Deogracias et al, 2007)，調査 3 では，日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度質問紙（佐々木・尾崎，2007）を用いた。

作成手続き　邦訳版質問紙の作成に先立って，原著者から日本語版作成の許可を得た。日本人の心理学者 4 名により，日本語訳を作成し，逆翻訳を行った後，最終的に LGBTQ 当事者団体に校閲を依頼した。調査は Gorilla 上で行われ，実験参加者はすべての質問において自由意思で回答することができた。

3. 結果・考察

3.1　日本語版 UGDS 質問紙

因子分析を行った結果，男性版・女性版ともに 3 因子構造となった。質問を因子別に並べると，男性版においては，F1 には社会的な要素が含まれており，F2 には身体的要素を含んだ質問が多く見られ，

F3 では男性的行為に関する質問が含まれていると推察した。女性版では F1 には性別違和感，F2 には女性としての満足度を問う要素が多く含まれており，F3 には女性的感覚に関する質問が含まれていると推察した。先行研究では男女ともに 1 因子構造であったため因子構造の異なる結果となった。これは，UGDS 内に，性別違和を感じていない人であっても当てはまることがある項目が存在していることが原因の 1 つであると考える。

3.2　日本語版 GIDYQ-AA 質問紙

因子分析を行った結果，6 因子構造となった。質問を因子別に並べると， F1 には社会的な場面における質問，F2 では性別違和感に関する質問が多く見られ，F3 には自分の性別に対する満足感を問う質問が含まれていると推察した。F4 においてはトランスジェンダーの質問，F5 では女装男子や男装女子的な要素が含まれていた。F6 では社会的精神違和感についての質問が見られた。先行研究では 1 因子構造であった。ジェンダー及びその周辺概念は，歴史的・文化的に変化していることが示唆されている。従って、因子構造が先行研究より細分化された理由の 1 つとして，ジェンダーの概念が，先行研究で調査された状況と今回の状況で異なっている可能性があげられる。

3.3　日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度

因子分析を行った結果，先行研究と同様に 2 因子構造となった。先行研究から，F1 を一致一貫的性同一性，F2 を現実展望的性同一性と名付けた。この質問紙では，身体的要素が含まれておらず主観的側面や感覚的側面が多くを占めている。さらに，そのなかでも抽象的な質問が多いため，先行研究を行った 2007 年から時間が経っていても同様の結果となったのではないかと思われる。

3.4　相関関係

日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度と UGDS, GIDYQ-AA それぞれの相関関係を調べるため，ピアソンの相関関係を求めた。 GIDYQ-AA との間には有意な相関が見られたが（r =.540, p <.01），UGDS との間には有意な相関は見られなかった（r =.114, p =.340）。これは，UGDS に含まれている身体的側面の質問が日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度には含まれていないことが理由の 1 つとして考えられる。また，GIDYQ-AA には日本語版ジェンダーアイデンティティ尺度と類似している要素が多く含まれていたため相関が見られたと考えられる。

3.5　総合考察

本調査では，原版よりも多くの要素が抽出される結果となった。これは，現在のジェンダー観が原版の調査を行った約 10 年前に想定されていたジェンダーの概念よりも細分化あるいは多様化されているからではないかと思われる。今後は，LGBTQ の当事者に対しても同様の調査を行って，質問紙の信頼性妥当性の検討をさらに進めていきたい。将来的には原版の質問紙よりも細かく性の多様性が調査できる質問紙の作成が必要だと考えられる。

引用文献

Deogracias, J. J., Johnson, L. L., Meyer-Bahlburg, H. F. L., Kessler, S. J., Schober, J. M., & Zucker, K. J. (2007). The Gender Identity / Gender Dysphoria Questionnaire for Adolescents and Adults. *The Journal of Sex Research*, *44*(4), 370-379.

Doorn, C.D., Kuiper, A.J., Verschoor, A.M., & Cohen-Kettenis, P.T. (1996). *Het verloop van de geslachtsaanpassing: Een 5-jarige prospectieve studie,* (*The course of sex reassignment: A 5-year prospective study*). Rapport voor de Nederlandse Ziekenfondsraad (Report for the Dutch National Health Council).

佐々木 掌子・尾崎 幸謙 (2007). ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成　パーソナリティ研究，*15*(3)，251-265.

Steensma, T. D., Baudewijntje, P.C., Kreukels, B. P. C., Jürgensen, M., Thyen, U., Annelou L.C. de Vries, A. L. C., Peggy T., & Cohen-Kettenis, P. T. (2013). The Utrecht Gender Dysphoria Scale: A Validation Study. Archives of Sexual Behavior. In: Thomas D. Steensma. From gender Variance to gender dysphoria. Chapter 3, pp. 41-56. Ridderprint BV.